

説教

創立19周年記念礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2017年6月11日（日）

主 題：「私たちの大祭司イエス」

—真の仲保者—

テキスト：ヘブル人への手紙7章1－10節

はじめに

・本日、私たちは教会創立19周年を迎えることができ、主である神に心から感謝をささげます。皆様の上にも、神の祝福がありますようお祈りします。

私たちの北浜チャーチは、生ける神にあって建てられた教会です。いや、神ご自身がお建てくださった「キリストのからだ」です。今日、私たちはその記念すべき日を迎えることが許され、本当に感謝しています。

・ところで、前回、私たちはヘブル人への手紙6章から「**変えることのできない二つの事**」（副題：「**安全で確かな錨**」）というテーマで、神のみ声を聞きました。著者はヘブル人クリスチャンへ、「**変えることのできない二つの事**」を伝えました。その「**変えることのできない二つの事**」とは、「**神の約束のことば**」と、「**神の誓いのことば**」です。神の「**約束のことば**」と「**誓いのことば**」に生きる聖徒は、**安全で確かな人生の旅路を送る人**です。

・さらに幸いなことは、神はそのような人生の旅路を送る者に、**幸いな希望を与えてくださること**です。

6:19 この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕（新共同訳：「至聖所の垂れ幕」）の内側にはいるのです。

ここで大切なことを学びました。

・私たち「**変えることのできない二つの事**」を信じ歩む者には、

① **安全で確かな「錨」があること**です。たとえ荒波が襲うようなことがあっても、その人の人生の舟には「**確かな錨**」が備わっていますから大丈夫です。

② そしてもうひとつ、それは天のエルサレムの神殿にある「**至聖所**」の内側に入る特権が与えられていることです。それこそ生ける神を信じる私たちの望みです。

・そして著者は7章に入り、だれでもキリストにある人は実に幸いな者であることを述べています。 2点

大切なポイント**1. イエスとメルキゼデクの祭司職の類似**

・**6:20 イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司とられました。**

- ・祭司は神と人との仲立ちをします。祭司なしには、罪深い人間と聖なる神の間に和解がなされませんでした。また、罪の赦しを得るための「いけにえ」も、祭司なしには捧げることができませんでした。ここで聖書が教える人間観を考えてみましょう。

1) 聖書の人間観

- ・聖書が教える人間観は、普通この世の中の人々が考える人間観とは違います。聖書以外の宗教は、簡単に神に近づけると考えますが、聖書はそんな簡単に神に近づけないと教えています。なぜかと言えば、人間は罪人であり、神は聖いお方であるからです。その罪深い人間が、罪人のまま、聖い神に近づけば神の裁きによって殺されてしまいます。
- ・罪人である人間が神に近づく道は、そこに祭司がいて、罪人の身代わりとして、動物の犠牲をささげることでした。旧約聖書の律法が教えていることは、そのことです。レビ記を開くならば、傷の無い牛や羊の頭に手を置き、自分の身代わりであることを表してから、祭司はその牛や羊を殺し、それを神に捧げることによって礼拝を行いました。レ
ビ記

1:2 「イスラエル人に告げて言え。もし、あなたがたが主にささげ物をささげるときは、だれでも、家畜の中から牛か羊をそのささげ物としてささげなければならない。

1:3 もしそのささげ物が、牛の全焼のいけにえであれば、傷のない雄牛をささげなければならない。それを、主に受け入れられるために会見の天幕の入口の所に連れて来なければならない。

1:4 その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである。

1:5 その人は主の前で、その若い牛をほふり、祭司であるアロンの子らは、その血を持って行って、会見の天幕の入口にある祭壇の回りに、その血を注ぎかけなさい。

1:6 また、その全焼のいけにえの皮をはぎ、いけにえを部分に切り分けなさい。

1:7 祭司であるアロンの子らは祭壇の上に火を置き、その火の上にたきぎを整えなさい。

1:8 祭司であるアロンの子らは、その切り分けた部分と、頭と、脂肪とを祭壇の上にある火の上のたきぎの上に整えなさい。

1:9 内臓と足は、その人が水で洗わなければならない。祭司はこれら全部を祭壇の上で全焼のいけにえとして焼いて煙にする。これは、主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。

- ・旧約聖書によれば、祭司はヤコブの12人の子どもうちレビの子孫でなければなりません。今、読みました「アロンの子どもたち」がそれにあたります。それが聖書が教える人間観です。みことばは、次のように述べています。

2) 祭司メルキゼデクとイエス

7:1 このメルキゼデクはサレムの王であり、いと高き神の祭司でしたが、王たちを滅ぼして戻って来たアブラハムを出迎え、そして祝福しました。

- ・王であり、祭司であったメルキゼデクは、イエスといくつかの類似点を持っていましたので、イエス・キリストの「ひな型」として述べられています。

7:2 アブラハムは、メルキゼデクにすべてのものの十分の一を分け与えました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。

古代ギリシャにおいても戦争で勝った場合、戦利品の中で最良のものを「神々」に捧げました。メルキゼデクという名の意味は、まず「義の王」、次に「サレムの王」、そして「平和の王」です。

- ・「義の王」＝メルク（王）＋ゼデク（正義）。
「サレム」（エルサレム）＝シャローム（平和）で、この言葉は日常の挨拶にも使われています（今日も）。
- ・イエスもまた、義と平和をもたらした王です。レビ族の祭司職は、レビから出た子孫によって受けつがれました。彼らはモーセの兄アロン、アロンの子孫です。しかしメルキゼデクはそのような系図なしに、祭司職を与えられました。著者は、彼はこのように祭司であると述べています。

7:3 父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

- ・メルキゼデクは出生が不明で、生涯についても何も分かりません。
しかし、彼は神が直接エルサレムに遣わされた人です。メルキゼデクこそ、イエス・キリストの原型です。大祭司アロンは長年にわたる祭司ではありませんでした。メルキゼデクは永遠にわたる祭司なのです。
- ・同様に、イエスは神によって祭司と任命され、永久に祭司としてとどまっておられます。皆さん！ イエスは私たちの祭司として、神と私たちの仲立ちをしてくださっています。私たちはイエスがもたらして下さる平和と義のゆえに、イエスを賛美するものです。
- ・このように著者は、メルキゼデクとイエスの祭司職の類似点を挙げました。そして更に、祭司メルキゼデクについて述べています。

2. イエスの祭司職の偉大さ

1) 祭司メルキゼデク

- ・7:4 その人がどんなに偉大であるかを、よく考えてごらんください。族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えたのです。

ユダヤ人の偉大な族長であり、信仰の父であるアブラハムでさえも、メルキゼデクに捧げ物をしました。それほどメルキゼデクは偉大な祭司でありました。ここで族長という語が遣われたのは、アブラハムは全人類の祝福の源であるという意味です。創世記 12 章

12:2 そうすれば、わたしはあなた（アブラハム）を大いなる国民とし、あなたを祝福

し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。

- ・ アブラハムが捧げたのは、戦いに負けたときに差し出す貢ぎ物ではありませんでした。また戦いを避けるために捧げる、和解の捧げ物でもありませんでした。⇒それは礼拝の行為として捧げられたものでした。
その行為に応答して、メルキゼデクはアブラハムを祝福しました。

・7:5 レビの子らの中で祭司職を受ける者たちは、自分もアブラハムの子孫でありながら、民から、すなわち彼らの兄弟たちから、十分の一を徴集するようにと、律法の中で命じられています。

- ・ レビ族は民からの「ささげ物」によって生活するのであって、イスラエル12部族の中で嗣業の土地を持つことは許されませんでした。レビ族以外の部族は、必ず全収入の十分の一を神に献げなければならないと定められていました。
そしてそれがレビ族の収入となり、レビ族もその中から十分の一を神に献げました。

民数記

18:25 主はモーセに告げて仰せられた。

18:26 「あなたはレビ人に告げて言わなければならない。わたしがあなたがたに相続財産として与えた十分の一を、イスラエル人から受け取る時、あなたがたはその十分の一の十分の一を、主への奉納物として供えなさい。

- ・ このように、イスラエルの民は祭司を通して神の前に出て、罪の赦しと、神の祝福を受けました。しかし今は、メルキゼデクの位に等しいお方、大祭司イエス・キリストがおられます。イエスは動物ではなく、ご自身の身を捧げられた大祭司です。天父神との真の仲保者です。
- ・ 私たちは今、何もはばかることなくイエス・キリストに近づくことが許されています。そして律法が求める、十分の一の「捧げ物」は求められていません。「捧げ物」だけではなく、律法から解放されています。今の時代を「恵み時代」と呼んでいます。律法ではなく、神への感謝の自由意志で「神への捧げ物」をしています。なんといい幸いです。ありませんか。これは、ただ神の祝福です。

2) 神の不思議 (祝福)

・7:6 ところが、レビ族の系図にない者が、アブラハムから十分の一を取って、約束を受けた人を祝福したのです。

これは、モーセの律法に違反しています。なぜならレビ族以外には、このような事は許されていなかったからです。このことからして、メルキゼデクは全く特別な人であることがわかります。

7:7 いうまでもなく、下位の者が上位の者から祝福されるのです。

- ・ 下位の者とは族長アブラハム、上位の者とは永遠の祭司メルキゼデクです。

イエス・キリストは上位のお方です。私たちがイエスの偉大さを崇めて礼拝を捧げるとき、私たちに祝福してくださいます。それは、アブラハムがメルキゼデクから、祝福を受けたように神の祝福にあずかるのです。感謝。

【例 話】女王に会わせてくださった方

- 昔、英国のビクトリア女王様が旅行をされた時でした。ある少年が女王に一目会いたいと思いました。それで、その少年は、女王が滞在している城に行き、会わせてくれるよう頼もうと心決めました。
- 少年がその城に近づくと、番兵が何の用かと聞きました。少年は、「僕は女王様にお会いしたいのです。」と言いました。番兵はあざ笑いながら、歩兵銃の先で少年を追い払いました。「すぐに帰らなければ、撃つぞ」と脅かしました。
- 少年は悲しくて、恐くなり、泣きながら、やむなく来た道を戻って行きました。しばらく歩いていると、少年は皇太子に出会いました。皇太子は「なぜ、泣いているのだね」と尋ねました。「女王様に会いたかったのに、番兵が会わせてくれなかったのです。」と返答しました。すると「そうか、では私と一緒に来なさい。私が女王に会わせてあげよう。」と言ってくれました。
- 少年は皇太子とともに、城の中に入ることができました。そこで女王に出会いました。女王は見知らぬ少年がいるのを見て、皇太子にその子は誰かと尋ねました。事情を聞いた女王は、にこやかに微笑み小さな訪問者にやさしく話かけました。驚いたことに、女王は少年に少しの小遣いを渡したそうです。
じつに美しいエピソードです。
- 皆さん。かつてはこういう時代がありました。今の時代では、このようなエピソードは信じられませんね。なぜなら、テロ事件（予測がつかない）頻繁に起こる時代になり、警備は非常に厳重であるからです。皇太子が少年を女王のところに連れて行ったように、イエス・キリストも父なる神のところに、私たちに導いてくださいます。感謝！
- 実は、私も今回米国で同じような経験をしました。皆さんもご存じのように、私は“World Summit”（ワールド・サミット）に招待されました。このサミットは BGEA(Billy Graham Evangelistic Association: ビリー・グラハム伝道団)主催でした。サミットの目的は、世界でキリストへの信仰のために、困難と迫害下にあるキリスト教会と聖徒を覚えるために開催されました。それは素晴らしい国際サミットで、世界165か国以上から代表が集まり、大きな感動と深い印象を受けた、そして何よりも恵まれたすばらし国際サミットでした。
- ところが、サミットのクライマックスに近づいたころです。私は世界一の大国と呼ばれている米国、そのナンバー・ツーのペンス副大統領にお会いしたのです。それは、私の方から望んだわけではありませんでしたが、私の友人である BGEA(副総裁の Viktor Hamm(ビクター・ハム)師がそのような場(機会)を作ってくれたのです。驚きでした。
- それは不思議な経験でした。彼は神を怖れる敬虔なクリスチャンです。Viktor Hamm(ビクター・ハム)師は、私にとって副大統領に会う仲保者でした。彼がいなければ、こんな

小さな日本人がペンス副大統領に会う機会はなかったでしょう。それは私にとって、神からの貴い贈り物でした。

- ・皆さん！ 同じように、イエス・キリストは、人と神との間に仲立ちしてくださるお方です。私たちはこのお方のゆえに、天の父なる神にお出会いすることが許されています。なんとという特権、幸いではありませんか。私たちは神の大いなる恵みに感謝し、礼拝を捧げようではありませんか。

ま と め

主 題：「私たちの大祭司イエス」

—真の仲保者—

- ・私たちはメルキゼデクに等しいイエス・キリストを、真の仲保者としてお迎えしています。それは律法によるのではなく、ただ神の恵みです。今は律法から解放された「恵み」の時代です。私たちは神の「恵み」を無駄にたくありません。感謝しましょう。
- ・今日のまとめの聖句として、次のみことばをお読みします。
6:20 イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。
- ・では、私たちはどう生きればよいでしょうか？
 1. 神のみことばを信頼し受け入れること
 2. 神に感謝し従順にお従いすること

* God bless you!